

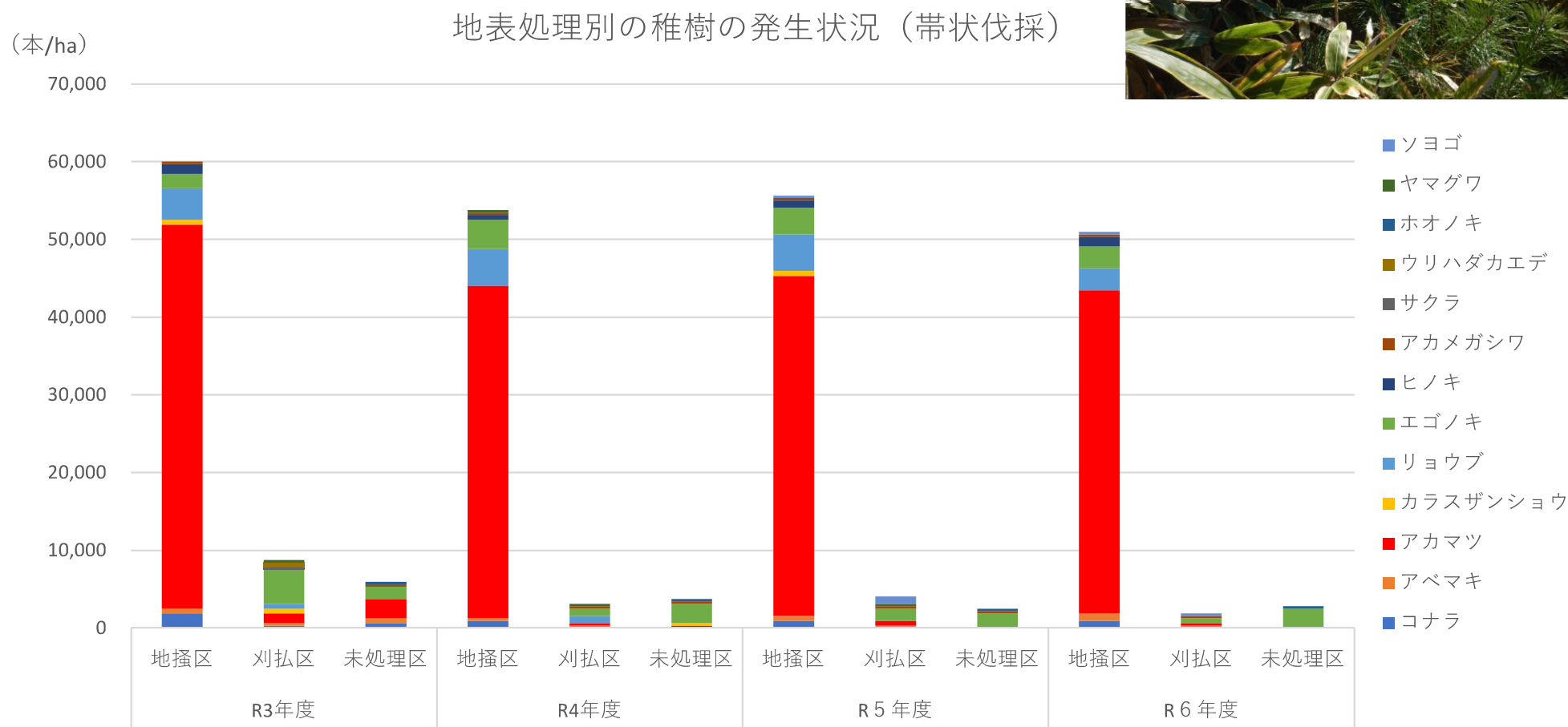
令和6年度天然更新調査結果

(帯状、皆伐、7割、高太郎)

調査期間：令和6年10月

帯状伐採区（天然下種） ※今年度で調査終了

- 地掻区の本数が最も多く、本数の経年変化はあまりない。
- 地掻区ではアカマツが多い。
(その他はリョウブ、エゴノキ、ヒノキ、コナラ、アベマキ、アカメガシワ、ソヨゴ)
- 刈払区の本数は減少傾向。
- 未処理区は少ない本数を維持。



帯状伐採区（天然下種）

帯状伐採区(令和元年度伐採)における有用天然木の発生状況 **全帯合計**

- 地掻区は30cm以上の有用天然木が1万本/ha以上発生しており、当局の天然更新の完了基準をクリア。樹種ではアカマツが多い。



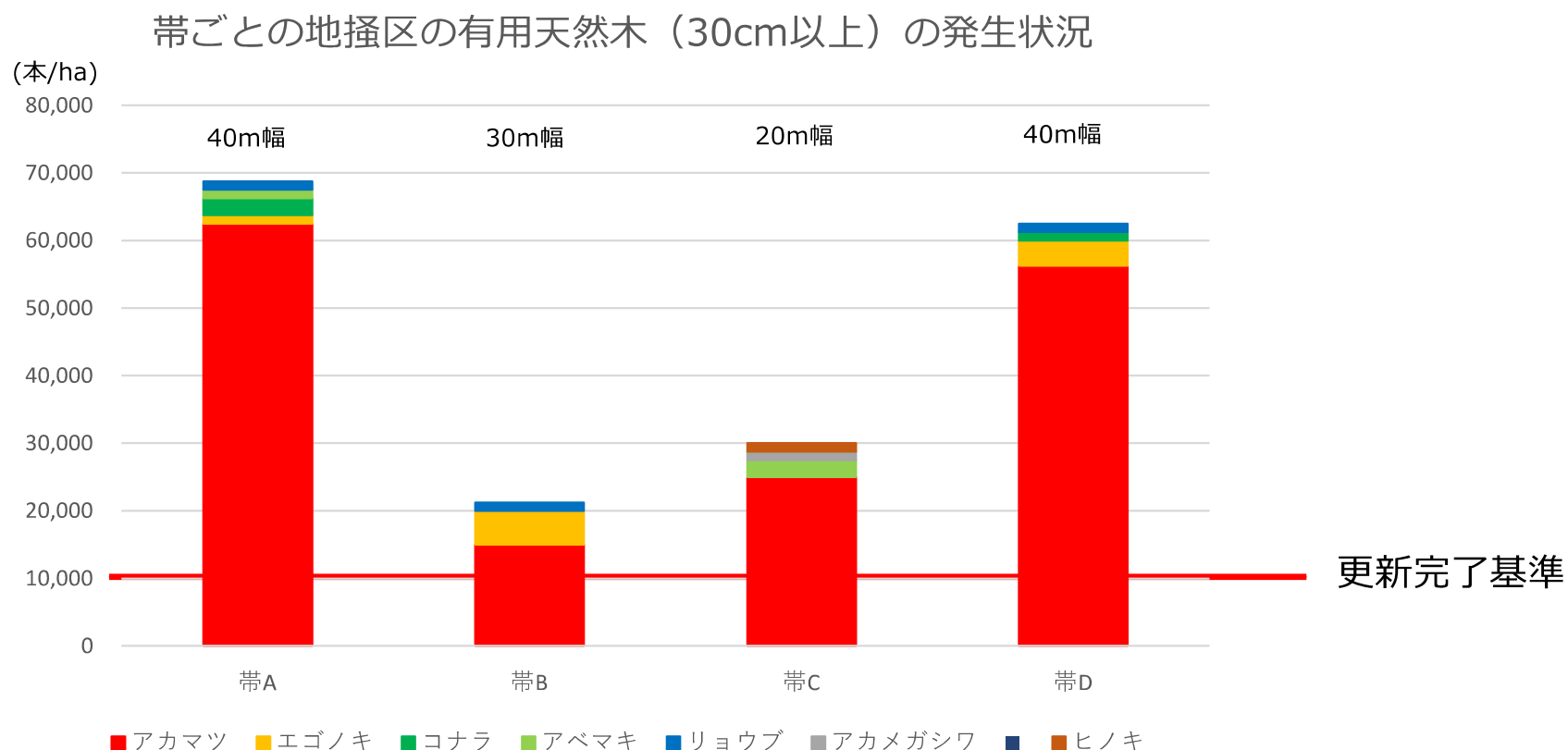
更新完了基準

伐採後おおむね**5年後**に、**60cm程度以上**の有用天然木がおおむね**5,000本/ha**以上、又は**30cm程度以上**のものがおおむね**10,000本/ha**以上生立した時期。

帯状伐採区（天然下種）

帯状伐採区(令和元年度伐採)における有用天然木の発生状況 地掻区 帯ごと

- 天然更新完了基準をクリアした地掻区について、伐採幅を変えた帯ごとに比較すると、有用天然木が多いのは40m幅。



更新完了基準

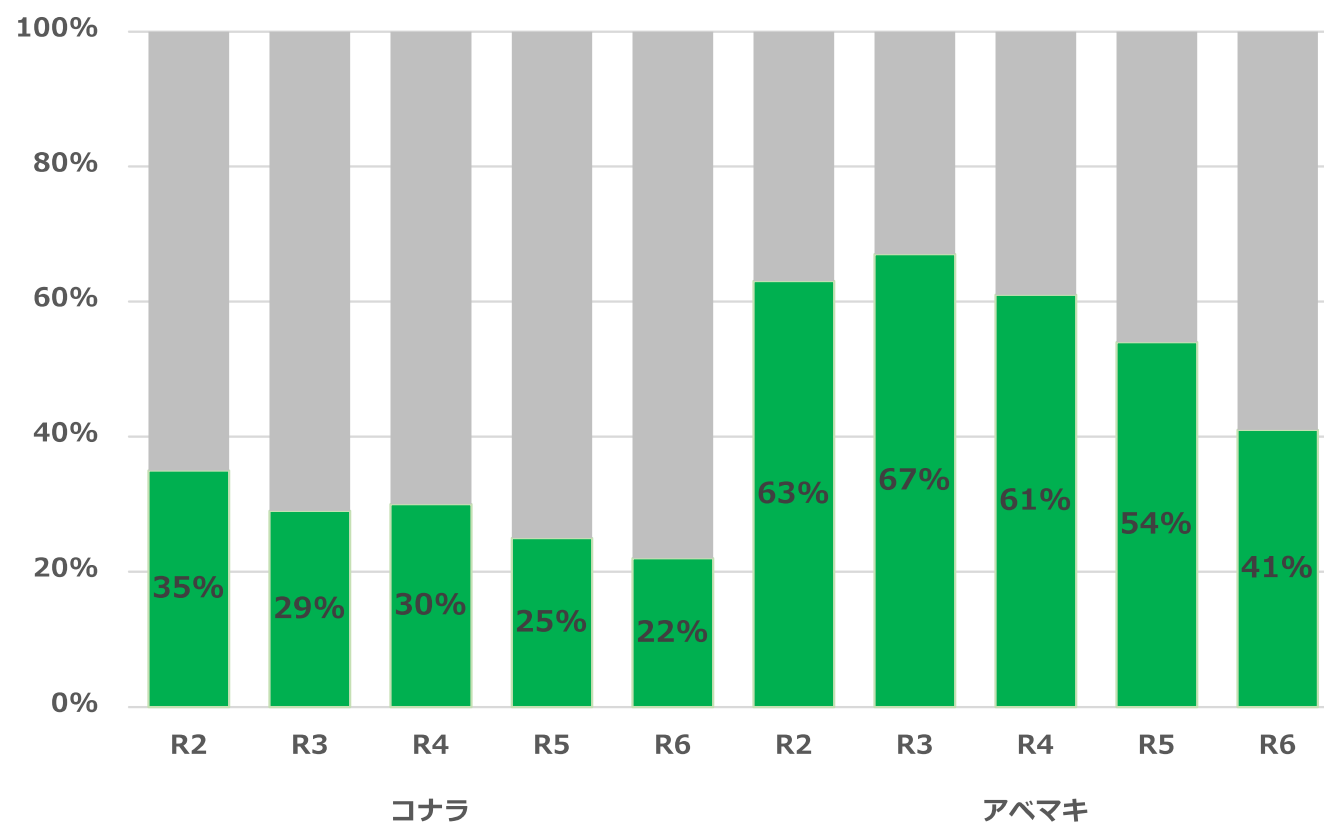
伐採後おおむね**5年後**に、**60cm程度以上**の有用天然木がおおむね**5,000本/ha**以上、又は**30cm程度以上**のものがおおむね**10,000本/ha**以上生立した時期。

帯状伐採区（萌芽）

※萌芽更新調査は他の伐区も含めこれで終了

- 伐採後5年でコナラ22%、アベマキ41%の切株で萌芽枝が維持。
（参考）5割伐区の5年目は、コナラ10%、アベマキ54%
- 高齢木の伐採でもアベマキはある程度萌芽更新が期待できる。

萌芽枝が発生した切株割合（帯状）



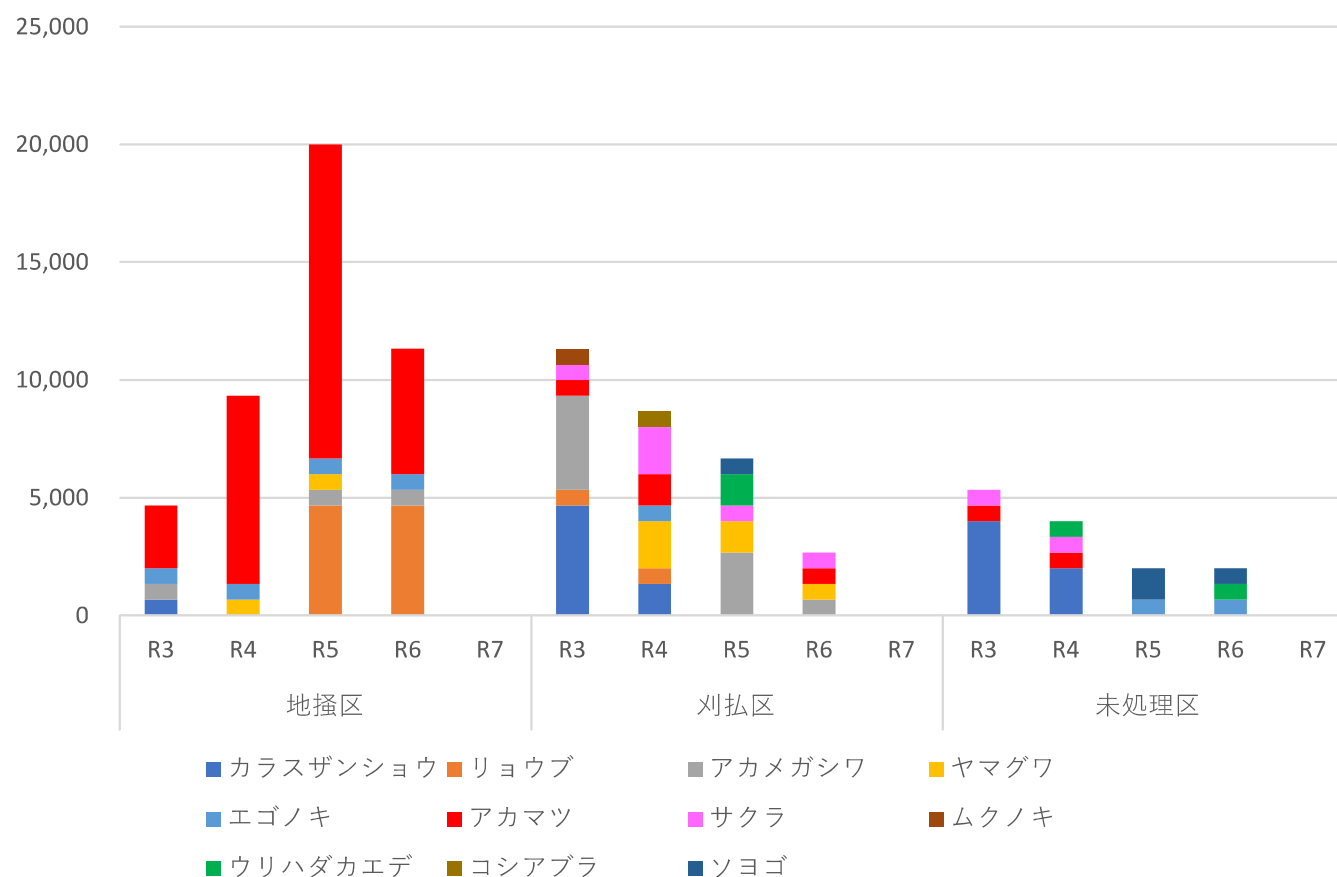
皆伐区

- 地掻区の本数が最も多いが減少。
- 地掻区ではアカマツ、リョウブが多い。
(その他エゴノキ、アカメガシワ)
- 刈払区は年々本数が減少。
- 未処理区は前年度本数を維持。



(本数/ha)

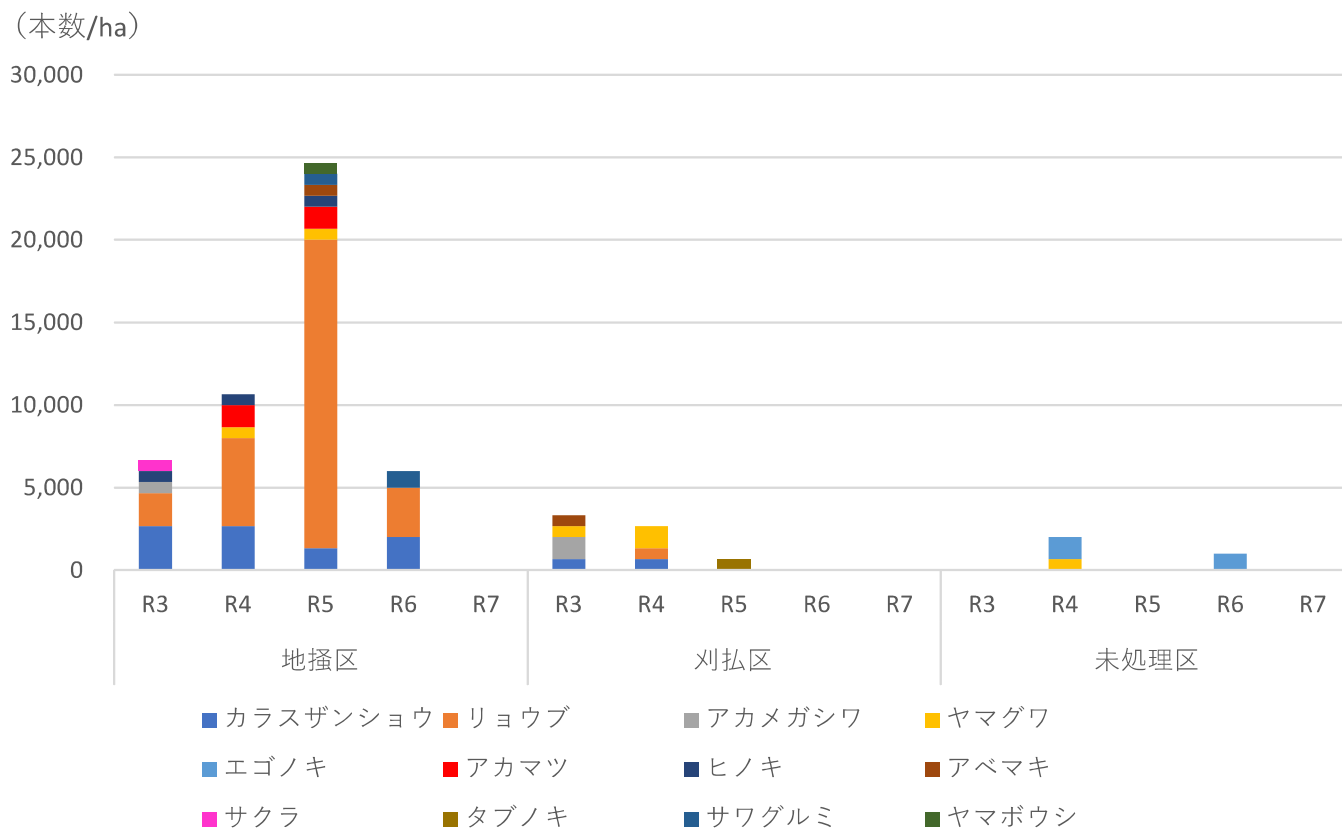
更新対象樹種本数 (皆伐区)



7割伐区

- 地掻区の本数が最も多いが減少。
- 地掻区ではリョウブが多い。
(その他カラスザンショウ、エゴノキ、サワグルミ)
- 刈払区は年々本数が減少し、R6はゼロ。
- 未処理区は発生、消滅の繰り返し。

更新対象樹種本数（7割伐区）



高太郎（皆伐）

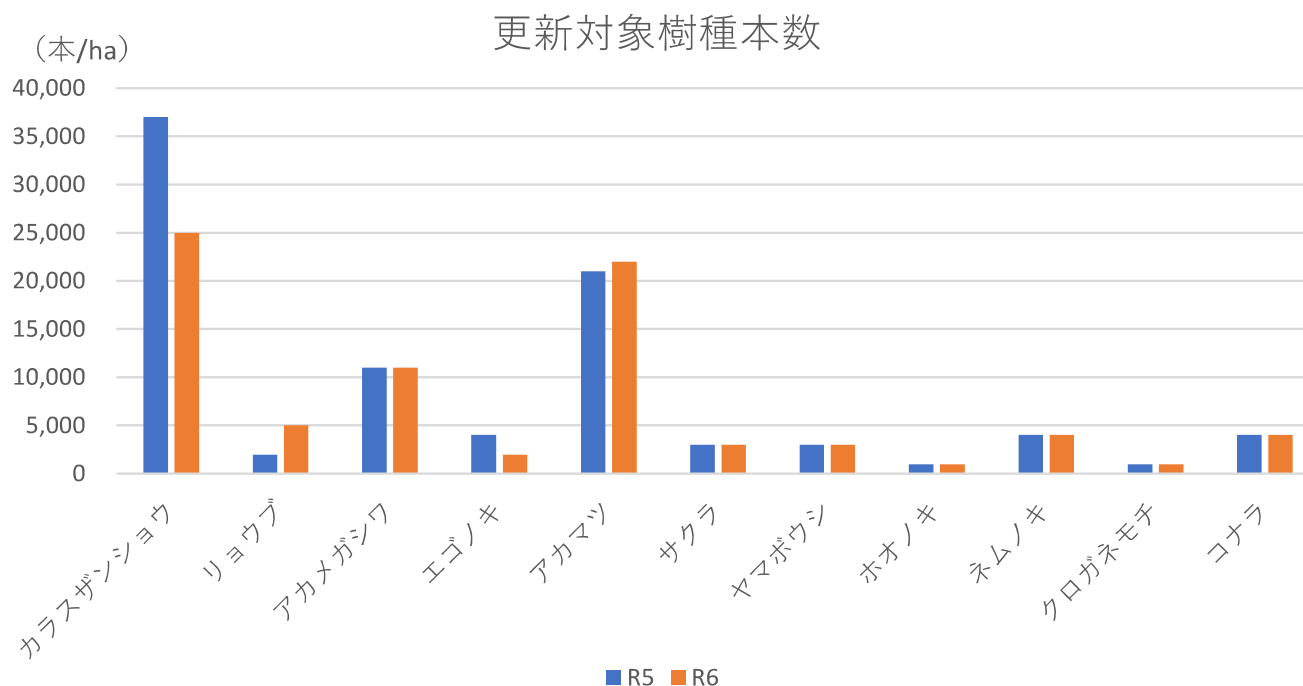
- 他の伐採区と比較してササが少ない。
- カラスザンショウ、アカメガシワなどの先駆種とアカマツが多い。
- 更新1年目に存在していた更新木が2年目も引き続き成長している傾向。



プロット1



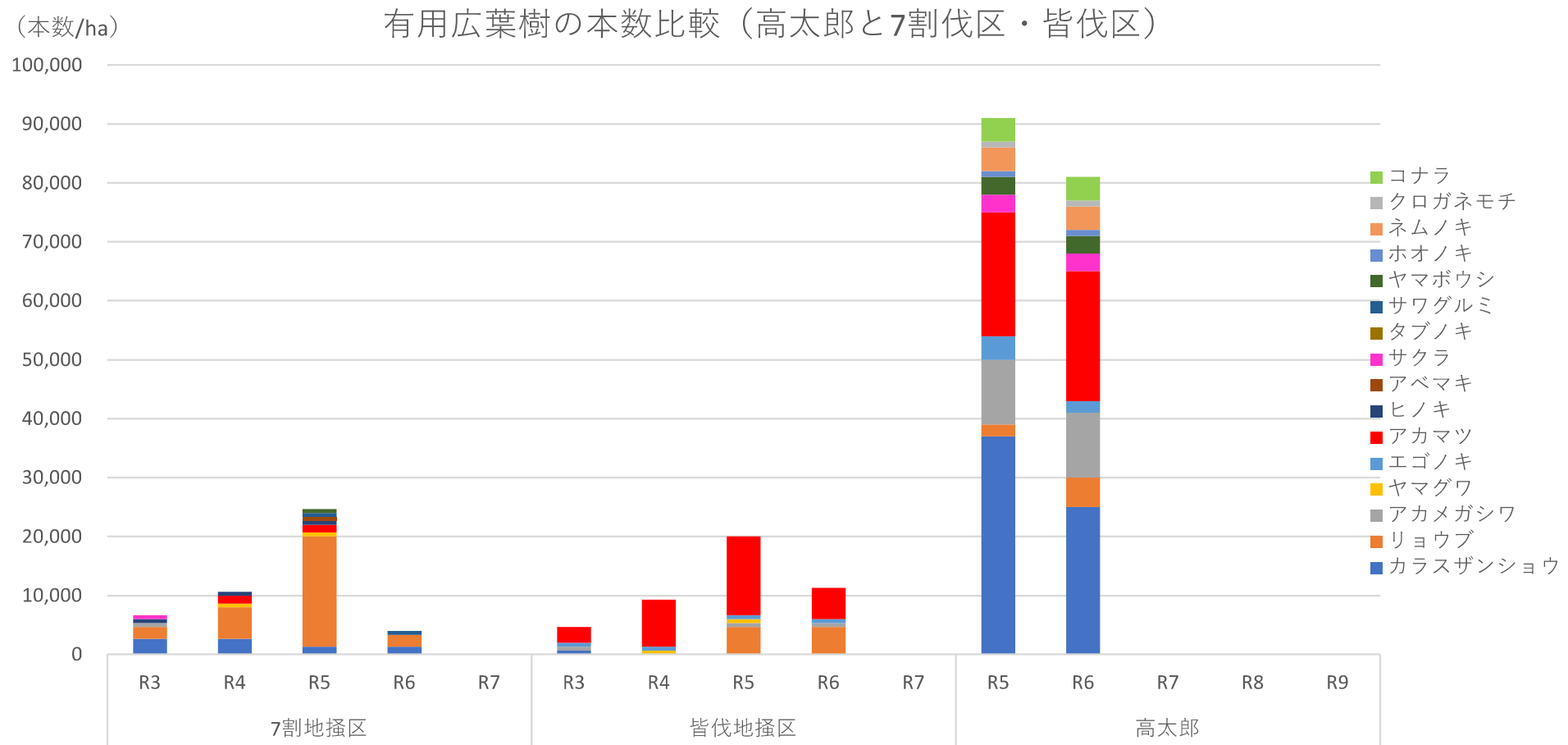
プロット2



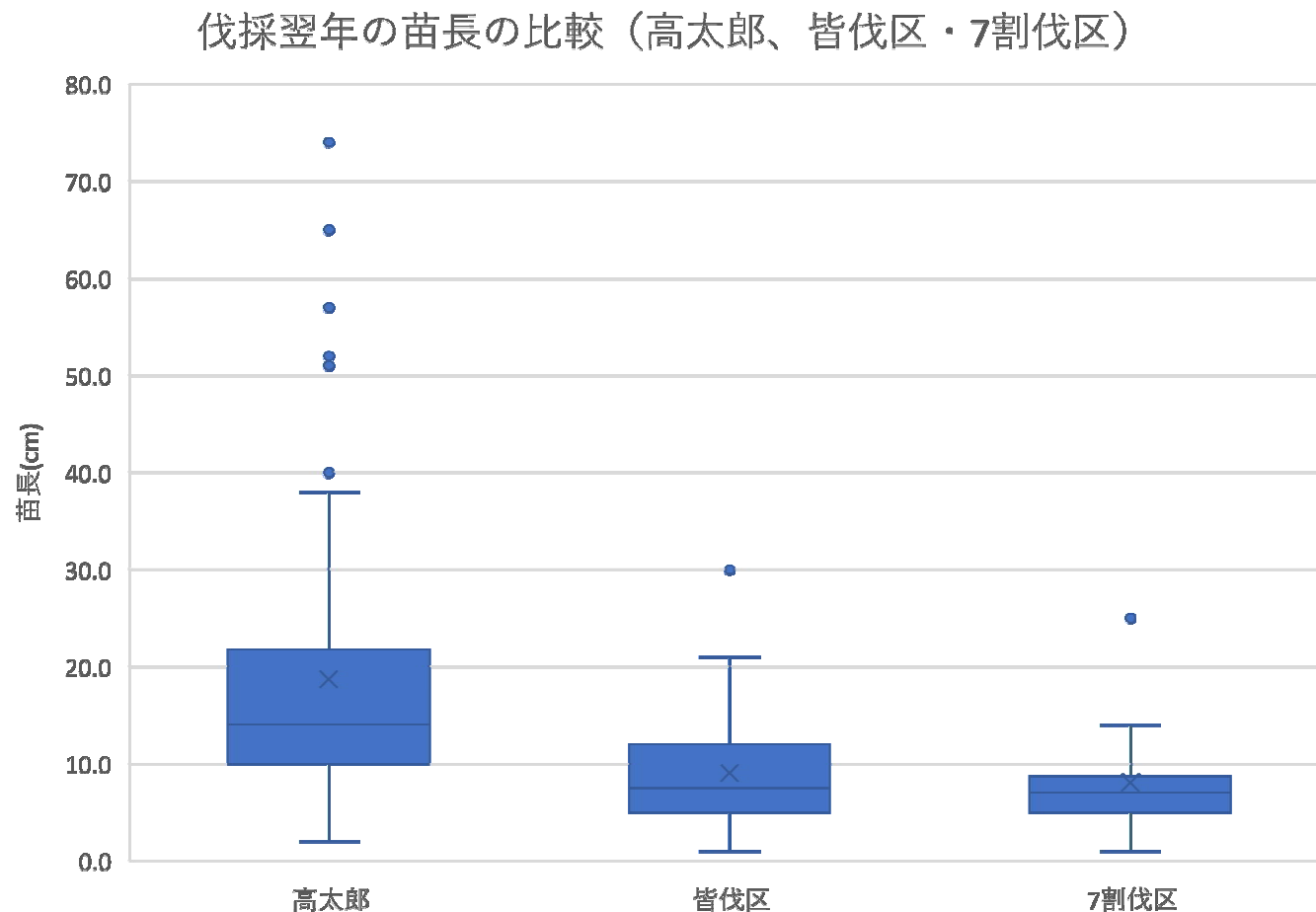
遷移上の位置づけ	種名	種子散布	生活型
先駆種	カラスザンショウ	周食	高木
	アカメガシワ	周食	
	ネムノキ	重力	
二次林種	コナラ	重力	高木
	ヤマザクラ	周食	
	ホオノキ	重力	
	エゴノキ	周食	亜高木
	リョウブ	風	
	ヤマボウシ	周食	
遷移後期種	クロガネモチ	周食	高木

ササが多い7割伐区・皆伐区と少ない高太郎の比較

- 本数の最も多い地掻区と比較してもササが少ない高太郎の本数が圧倒的に多い。
- 斜面上部近距離に母樹となり得る広葉樹林があることも影響している可能性。
- コナラ等が少ないのは動物による種子持ち去りの可能性。



- 伐採翌年の苗長で比較すると、ササが少ない高太郎が最も大きい。
- 高太郎で特に大きいものは伐採前から存在していた前生樹の可能性。



(参考)

高太郎更新2年目の
更新対象樹種の樹高

